

「食道腫瘍の臨床病理」

東京女子医科大学助教授・消化器病センター 井手 博子 著
 東京女子医科大学助教授・消化器病センター 遠藤 光夫

杏林大学教授・第2外科
 鍋 谷 欣 市

2カ月ほど前に井手博子、遠藤光夫両先生の著書「食道腫瘍の臨床病理」の書評を求められ、1度目を通したところ、どうしても熟読しなければ書けない気持ちにさせられた。それは1頁もゆるがせにすることのできない充実した内容で、まさに食道腫瘍臨床病理の辞典とも言うべき内容でもあったからである。

著者の2人は今さら紹介するまでもなく、東京女子医科大学消化器病センターにおいて中山恒明先生に師事し、本邦における食道癌の診断、治療の最先端をリードしている外科医である。

本書の最大の特徴は、1,000例を越す食道癌切除例について詳細な検討を行い、臨床病理の名のごとく常に実例を示し、術後経過もはっきりと述べている点であろう。

目次を追って内容をみると、Iの

“食道癌の臨床”は、本邦における食道癌取扱い規約に準拠して要点の解説をすると共に、今後の問題点についても著者なりの見解を述べている。IIの“食道癌の臨床病理”では、各種病変の分類から上皮内癌、粘膜内癌、副癌巣などの微細病変の診断法と所見を述べ、更に放射線治療例にも触れている。IIIの“食道腫瘍の組織分類”では、悪性腫瘍はもちろんのこと、まれな良性腫瘍についても基準となる分類を示し、辞典の役割を果たしている。

ここで形式は一変し、本書の最も優れた内容とも言うべき肉眼形態と組織像が続く。すなわち、豊富な症例の中から105例を選んで13の項目に分類し、1例ごとの組織像について見事な解説を加えている。

特に私には、早期癌、表在癌の項が素晴らしく感じられる。早期癌に

ついては21例、表在癌については15例の多くを挙げて、その発育進展様式に検討を加えている。このような検討は、食道癌の早期診断から疫学的対策をも示唆するもので、食道癌治療成績向上のための最も重要な知識と考えられる。

扁平上皮癌以外のまれな症例も、是非1度は読ませたいところである。腺癌、腺表皮癌、未分化癌、腺様嚢胞癌、粘表皮癌、基底細胞癌、癌肉腫、悪性黒色腫などがきちんと整理されている。良性病変も一般には多くないはずであるが、実によく集められており、最後に正常食道組織像を載せるなど、著者の1人である井手先生の女性らしい細かな心遣いが感じられる。

ローマは1日にして成らずと言うが、東京女子医科大学消化器病センターにおける十数年の努力が結実して、そのローマが完成したように食道腫瘍の臨床病理が書かれている。しかし、著者らはなお満足していないところに今後一層の発展が期待される。その意味も含めて私は、是非近い将来英文にして全世界に出版されるよう祈るものである。

A4 頁394 図17 写真454 原色図146
 色図34 1984 年 ¥34,000 円600

医学書院 刊